

所信表明

二〇二五年度中央常任委員長選挙所信表明

中央常任委員長区分の立候補者は三名です（定数一名）

中央常任委員長候補①

文学部 三回生

小西 勇輝（こにし ゆうき）

はじめに

この度、立命館大学学友会中央常任委員会中央常任委員長に立候補いたしました、文学部・人間研究学域教育人間学専攻三回生の小西勇輝と申します。正課では、人間形成という観点から教育人間学を研究している他、教職課程において国語科の免許取得に向けて学んでいる学生です。また、インドア・アウトドアに関わらず様々なモノを趣味としており、多くの人と関わりを持って過ごしています。

学友会での主だった活動としては、文学部自治会・戦略企画室・学園振興委員会・新歓実行委員会といった団体での活動や2023年度夏中バリの運営チームが挙げられます。

本文では、「これまでの学友会活動の関わりについて」「来年度の学友会における方向性」「方向性を実現するための戦略」について、述べさせていただきます。

【これまでの学友会活動の関わりについて】

〈2022年度〉

私は、一回生の四月末ごろから学友会中央パートとしての活動を始めました。大学に入学したばかりで学友会について何も知らなかった私ですが、縁あって当時の中央常任委員長と話をする機会に恵まれました。そのときに初めて学友会という組織を知り、積極的に活動していくことを心に決めました。文学部自治会と戦略企画室が、私の一回生時の活動です。

文学部自治会での活動は、今の私を形作る原点といえます。前年度の文学部自治会は積極的な活動が行われておらず、自治会として機能できていなかったそうです。私は、代替わりを経てそうした自治会を変革しようというタイミングに入会いたしました。新たな活動基盤を創っていく段階であったため、一回生ながらも必然と自治会活動へ深く関わることができました。学生大会の議案書づくりや生協との懇談会を通じて、学生のために活動することの意味や難しさを知ることができました。

戦略企画室での活動は、また違った刺激を得られるものでした。学友会では、2022年度新たに戦略企画室が立ちあがりました。現在の学友会六本柱では補えない活動を推進するためです。そして、学生・教職員・地域の交流を促進するクリスマス企画を開催することとなりました。衣笠キャンパスで行われたこの企画は、初開催にも関わらず来場者三千人を記録しました。自分自身が関わっていたからこそ、学友会が学生の可能性を広げられる組織であることを確信しました。

このような団体での活動以外に印象的なのは、四年に一度の公開全学協議会が開催

された年だったということです。これからの教学や大学づくりに向けた学友会の参画のあり方などが協議されました。学友会側と大学側の議論の様子から、学友会の視座は、過去を経て、現在だけではなく未来を見据えていく必要があることを実感いたしました。

一回生では、学友会組織についての考えや活動の意味を知ることができたと思っています。

〈2023年度〉

二回生になり、文学部自治会では委員長として活動することとなりました。これまではプレイヤーとして活動してはいたのですが、代表として組織をマネジメントしていく経験を積むことになりました。自治会として、やりたいことではなくやらなければならぬことに優先順位をつけ活動していく。そんな意識を持って活動に臨んでいました。特に重要だと感じていたのは、五者懇談会です。学部において、大学と学生が直接的に議論できる場合はそう多くありません。要求実現運動から学園共創活動へと、形を変えた議論の様式をもとに、文学部生の代表として学生の課題解決のための議論を行いました。議論以外に力を入れた部分は、広報面の強化です。例年、自治会と学生の距離が遠い部分は課題に感じておりました。そこで、公式LINEの導入やオリター団との連携を通じて、自治会そのものや様々な企画の広報を行っていきました。そして、新たに学園振興委員会での活動も始まりました。昨年度の最も大きな活動は、全学アンケートを実施したことでしょう。数ヶ月かけて、学部生全体を対象とし

たアンケートを作成いたしました。結果として5795件の回答結果が得られ、現在まで至る全学議論の基盤となっています。学園振興委員会は、学友会での全学議論を主導していく立場にあります。よって、過年度議論にも触れる機会があり、豊富なデータやその分析を通じて、大学との関わり合いという視点から、学友会としての考え方をさらに深めていくことができました。

さらに、夏季中央パトリリーダーズ研修（通称：夏中パリ）の運営チームでも活動していました。私の主な役割は、研修コンテンツの作成です。中パリの開催目的である研修と交流という軸を、参加者が感じられるようなコンテンツを作るという部分を工夫しました。三日間の行程には、福岡大学学友会との交流も含まれていたため、互いの学友会の相違点を活かしたグループワークも考えていました。中パリを通じて、学友会の考えに触れ、学生同士の交流ができる空間を創り出せたと思っています。二回生では、学友会での活動をより主体的に行うための、見方や方法を学ぶことができた一年でした。

〈2024年度〉

三回生では、新たに全学行事として新歓実行委員会の委員長を務めることとなりました。「進め 新たな日常へ」をスローガンに掲げ、三月から五月と十月に新歓企画を行いました。このスローガンを掲げた理由は、新入生が大学という場で新たな生活を送るためのサポートをしたいという思いからでした。例年の新歓は、サークルと学生が出会う場という印象が強かったです。それ以前の、新歓を皮切りに新たな生活が

始まっていくという部分にも着目する意図がありました。この方針の達成例として、ウエルカムフェスティバルでのラリー企画が三キャンパスで行われたことを挙げさせていただきます。今年度は、キャンパスの主要施設やサークルブースを周るラリー企画が三キャンパスで行われました。この企画を通じて、新入生がこれから過ごしていくキャンパスへの理解を深められたに違いありません。他にも様々な企画が行われたウエルカムフェスティバルは、特別事業部や対外協力といった多くの方々が参画してくれたおかげで成功を収めることができました。

今年度は、秋新歓にも力を入れようと秋に実行委員会企画をいくつか実施いたしました。全学行事の主力である特別事業部の力を借りられないなかで、今ある施設や学内組織といった学内リソースを活用することにしました。初めての試みであったため、まだまだ発展途上ではありますが秋新歓の実現例を示せたのではないかと思います。

以前から継続している文学部自治会や学園振興委員会の活動では、より高度な学園共創活動を担えていると感じております。教学部や学生部とのマクロ視点での懇談会以外にも、個別具体的な課題解決が目的であるミクロ視点の懇談会も開催されました。これまでに培った考え方を武器に、積極的に議論へ参画してきました。

三回生では、これまで得た経験を活かして活動を行っております。

私は、これまで三年間をかけて学友会という組織のなかで多くの立場を経験させていただきました。そこで得た知見をもとに、私は以下を来年度の学友会の目指すところだと考えます。

【来年度の学友会における方向性】

現在の学友会は、2022年度公開全学協議会から始まる流れの中にと考えられます。2022年度は、コロナ禍で途切れた学友会活動を整理し、現在の活動まで続く基盤を作成する年度でした。2023年度は、中長期的な視点を用いてこの基盤を未来まで紡いでいくための組み上げが行われました。そして、2024年度は組み上げをもとに学友会活動の在り方を問い直した年度だと捉えています。2025年度は、こうした流れを締めくくる年になると自覚しております。

ここから、私が目指すところとして掲げるのは「学友会の活性化」です。過年度学友会の政策によって、継続して活動するための基盤は作られてきました。この基盤は、先人の知恵や工夫で形成されており、活用の仕方次第で団体に与える影響は変わってくるでしょう。ゼロから何かを始めることと、すでにあるものを発展させるのでは力が段違いだからです。活動基盤があることは発展のきっかけではありますが。それぞれの団体がより高度な活動ができる体制を創りたいと思っています。一方、様々な理由で活動がままならない団体が存在しているのも事実です。こうした団体に対しては、これまでの事例をもとに活動基盤を形作る支援をしていく所存です。

おそらく2026年度は、新たな学友会の流れが始まることになるでしょう。その流れに紡いでいくため、私たちの代では学友会を活性化させていく責任があるのです。こうした方向性を実現するために、次のような戦略で活動していきます。

【方向性を実現するための戦略】

・学友会と大学の議論を振り返る風土づくり

学友会は、これまで大学と様々な議論を行ってきました。議論の内容は議事録や書類データといったもので受け継がれていますが、これまでに振り返る機会は少なかつたのではないのでしょうか。私自身も、全学アンケート作成などのきっかけがなければ知らなかったかもしれません。しかし、学友会の歩みはこうした大学との議論に表れています。振り返るための課題は多くあるので、主要議論の流れに絞るなどの工夫をしながら行っていきます。

・学友会における活動意義の整理

学友会の活動理念として「想いをカタチに」が掲げられています。では、このカタチにしたい想いとほどのようなものなのでしょうか。学友会では、個々人や各団体が何かしらの意図をもって活動しています。そして、その行動指針は時代に合わせて変容するものでもあります。最近では、学友会の六本柱である要求実現運動が学園共創活動へと名前を変え、学友会と大学の在り方が変化することとなりました。新たな活動基盤が作成され、次代へつなぐ今だからこそ、学友会で活動することについて問い直していきたいと考えています。

・中央パート同士のつながりの創出

学友会のなかで活動していく際に念頭に置かなければならないのは、私たちは課外

自主活動として行っているということです。各々がやりたい思いをもって集まっています。課外自主活動の醍醐味は、そうした仲間と共に切磋琢磨して活動していくことです。24年度の学友会方針には「仲間とともに活動できること」が挙げられています。私もそれを引き継ぎ、学友会を中央パートで活動している団体やメンバー同士がつながれる環境にしたいです。

そして、これは活動の活発化にも発展します。中パリでの経験がこの考えの核となつていきます。中パリを経て気付いたことは、交流を深めることで活動のモチベーションが向上するということです。学友会の多様な考え方に触れる空間では、学生同士が自身の考えや行動を積極的に言語化しているように感じられました。人とつながる空間は、活動を活性化するための好循環を生み出します。

・中央パート内での積極的な情報共有の推進

これは、ただ他団体の活動を知るという意味ではありません。先述したつながりの創出から続く話にはなりますが、団体ごとに行っている活動を共有することで自団体に活かしてもらうことが目的です。中央パートには20を超える団体があり、それぞれが独自の役割を担っています。役割に沿った活動やそれを行っていくためのノウハウを共有することによって、活動がさらに発展していくでしょう。

・課外自主活動団体の活動環境整備とそのための連携強化

これは、課外自主活動団体が活動していくためのインフラを整備するという意味です。もちろん中央パートだけではなく、公認団体やその他課外自主活動団体も含まれ

ています。学友会活動の多くは、中央パート以外の団体がいることで行うことができています。そんな課外活動を行うために必要なインフラは、人的資源や施設を指します。今年度、シャトルバス懇談会での課題解決や中央事務局による課外団体連絡会が行われました。全学行事やサークルコレクション以外に、学友会としてハードとソフトの両面から団体と伴走した例だといえるでしょう。しかし、まだ確立できている段階ではありません。その要因としては、課外自主活動団体を知りきっていないことが挙げられます。今後、団体の課題を感じ取り支援していくためには、団体との連携を強化することが必須に違いありません。団体のことを知ることで新歓や学園祭も発展していき、連携することによって課外活動のための環境整備ができれば、さらに学友会の活性化にもつながるでしょう。

・人材を鍛えるための育成方法を確立する

学友会中央パートでは、毎年人がいないという言葉が耳にします。その原因は複数ありますが、私が着目したのは中央パートに関わった人を育てきれていないのではないかとこの部分です。学友会の体質として、人材育成は団体ごとに行われています。この形式では、団体ごとに教えられる人数や知識が異なるのでムラが生じます。そこで、来年度は学友会としての研修に力を入れていきたいです。今年度の自治会ビギナーズ研修のように、対象者を定め適切な範囲で研修を行っていくことが、次代を担う仲間を見つけてることになるのではないのでしょうか。これまで通り、新たな人材を獲得する努力は怠りませんし、団体ごとの研修や中パリでの研修も蔑ろにはしません。そ

れらと組み合わせることができれば、人材獲得において大きな相乗効果が期待できます。

・過年度から続く引継ぎ文化の継承と発展

私たちが現在まで活動できているのは、過去の先輩たちが活動の礎を築いてくれたからにほかなりません。その背景には、活動内容や考え方を後輩へと託していく引継ぎの文化があります。この文化を継承し、ときには発展させていくことも私たちに必要なことです。

いずれも、個別で行っていくものではありません。ときには繋げながら、総合的に学友会を発展させていくための戦略です。

おわりに

これまで述べさせていただいたように、私は学友会で様々な経験を積ませていただきました。学友会の一員としてだけでなく、人として多くの成長できるきっかけを得られたと思っています。それは、中央パートなどに関係なく学友会に所属する多くの人が感じられているところでしょう。私は、学友会で主体的に活動できていることを誇りに感じています。そして、次は自身の手で、この組織をさらに発展させていきたいと考えています。

みなさまからの信任をいただき、中央常任委員長として来年度頑張らせていただきます

たいです。よろしくお願いいたします。

次のページより二人目の候補者による所信表明を掲載しています。

併せてご確認ください。

中央常任委員長候補②

法学部 四回生

三島 隆太郎（みしまりゅうたろう）

この度、2025年度中央常任委員長に立候補いたしました。法学部4回生の三島隆太郎です。私は学生時代を通じて、サークル活動やイベント企画、そして人と人をつなぐ役割を通して得た経験から、民主主義というものの大切さと、その実現には透明性が不可欠であることを強く実感してきました。とりわけ、立命館大学には末川博総長によって掲げられた「立命館民主主義」が存在し、これは大学全体で民主主義を支える大切な価値観として根付いています。立命館民主主義の理想を達成するためには、大学側と学生側が相互に協力し、意見交換を通じて健全なコミュニティを築くことが不可欠です。そして、学生が積極的に関与し、発言するための場を学友会が提供するものが何よりも重要だと私は考えます。

トクヴィルが『アメリカのデモクラシー』で述べたように、民主主義の発展には中間団体の存在が不可欠とされています。中間団体とは、市民と公権力をつなぐ役割を担い、両者の調整役となる組織です。立命館大学において、この役割を果たすのが学友会です。したがって、立命館民主主義の基盤を支える学友会こそが、大学における学生と大学当局との対話を深め、健全な民主主義の発展に貢献すべき存在であると確信しています。しかし現状では、多くの学生が学友会の存在すら認識しておらず、自治組織としての役割が果たされているとは言い難い状況です。この問題を解決し、学

生が主体的に大学の運営に関わるためには、まず学友会の透明化が必要不可欠です。私は、中央常任委員長として学友会活動の透明性を高め、学生たちに開かれた組織として機能させたいと考えています。

中央常任委員長として、私は学友会の代表者として政策意思決定に積極的に参与し、中央委員会の統括を行うだけでなく、学生の声を大学側に適切に届け、対話を重視した意思決定プロセスの改善に努めます。私は大学生の間に、サークルを立ち上げ、100人以上を超えるメンバーを巻き込み、様々なイベントを成功させてきました。イベント企画においては、学生同士の調整のみならず、行政組織との交渉も経験し、より多くの人に影響を与える方法を学びました。この経験を活かし、中央常任委員長としてタフなネゴシエーターとしての役割を果たし、学生たちの利益を守り抜く覚悟を持っています。学友会は学生のための団体であり、学生の声が大学側の意思決定に反映されるよう、積極的な交渉を行っていくつもりです。

共創の理念は、スローガンとして掲げるだけでなく、具体的な行動を通じて実現するものであると考えています。大学と学生が対話を通じてより良い解決策を共に見出し、両者が協力し合って大学運営に参画する姿勢こそが「共創」です。しかし、現状では、大学側が意思決定において優位的な立場に立つケースが多く、学友会が後手に回って対応する構図になりがちです。この状況では、学生の声が適切に反映されず、共創が目指す協働的な関係とは程遠いと感じています。私が目指すのは、大学と学友会が対

等なパートナーとして協力し合い、学生が納得できる解決策を共に築き上げることで
す。

さらに、学友会の活動においては、透明性の欠如が大きな課題です。学生たちとの信
頼関係を深めるためには、議事録の公開方法の見直しや、学友会が行っている活動や
決定事項を平等に共有する仕組みが必要です。現在の状態では、情報が限られた一部
にしか伝わらず、多くの学生が自治組織の活動に対して関心を持ってない状況です。こ
の状況を打破するため、私は透明性を徹底し、学生たちが学友会の活動に積極的に関
与できる環境づくりに努めたいと考えています。透明性向上は、共創の理念を現実に
引き寄せ、学内の信頼を深めるための第一歩であり、学生と自治組織の間に健全な信
頼関係を築くために欠かせない要素です。

また、学生団体支援についても、現行のプロセスに効率化が必要であると感じていま
す。デジタル化を活用して、学生団体からの申請や支援が迅速に行える仕組みを整え、
手続きの円滑化を図ります。さらに、学生団体同士の協力を促進し、情報共有の場を
設けることで、団体間の連携が強化され、学内全体の活力が一層高まることが期待さ
れます。学友会が柔軟かつ効果的に学生団体をサポートすることで、学生たちの活動
がさらに発展し、学内エンゲージメントも向上すると考えています。

総じて、シャトルバスの減便問題を含む数々の課題は、共創の理念が試される機会で

あったと捉えています。これを契機に、表面的な協力ではなく、実質的な共創を実現するために、学生一人一人が積極的に大学運営に関わり、学友会がその声を適切に反映するプロセスを強化する必要があると考えます。共創という言葉が単なる形式にとどまらず、真に機能するためには、現在の課題に向き合い、学生と大学が共に進化する姿勢を持つことが求められています。私は、中央常任委員長として、学生の声を代弁し、共創の理念を具現化すべく、大学全体と真剣に向き合い、信頼と共感を得られる学友会を目指して尽力する所存です。

共に新たな大学の未来を創り上げていくために、民主主義のために戦う唯一の候補、三島隆太郎をどうぞよろしくお願いいたします。どうか皆様、三島隆太郎に清き一票を！

次のページより三人目の候補者による所信表明を掲載しています。

併せてご確認ください。

中央常任委員長候補③

法学部 二回生

山川 凌（やまかわ りょう）

このたび中央常任委員長に立候補いたしました、法学部二回生の山川凌と申します。本所信表明では、立候補に至った経緯・動機について説明いたします。

私は、立命館大学が是とする平和と民主主義の理念を学生の立場から貫徹するべく、中央常任委員長に立候補いたしました。まず、私は立命館大学学生の総意として、パレスチナ・ガザ反戦の立場を示すことができるよう、働きかけを行いたいと考えています。

今、パレスチナのガザ地区においては、凄まじい虐殺が行われ、未曾有の人道危機を引き起こしています。ガザにおける危機はまさに人間性の危機です。ガザにおいては、全ての大学が破壊され、書物が焼かれ、数多くの学生・教職員が殺されています。この状況に際して、私たちは黙って学問に勤しみ課外活動に取り組むことなど出来るはずがありません。私たちは平和と民主主義を是とする立命館大学の学生として、反戦とパレスチナの連帯の立場を示し、歴史的・社会的な正義の砦として立つ必要があります。

立命館大学の学園・自治会は、歴史的に平和と民主主義の立場を貫いてきました。立命館大学では、ロシアによるウクライナ侵攻に際して、学園・自治会ともに事態を憂慮する旨の声明を出しています。しかし、ガザの危機に際しては、学園も自治会も未だに沈黙を保ち続けています。これはまさに、正義に対する二重基準（ダブルスタン

ダード)的態度と言わざるを得ません。私はこのようなダブルスタンダード的態度を改め、明確にパレスチナの人々に対する虐殺・占領を許さないという意味を立命館大学の学生の総意として示すように働きかけたいと考えています。

次に、私は立命館大学の平和と民主主義の理念を貫徹せんとする立場から、立命館大学による大阪・関西万博への協力体制を再考するように働きかけたいと考えています。2024年には大阪夢洲で万博が開催されます。この万博に対して、立命館大学は全学的な協力を行っています。しかし、博覧会というイベントは歴史的に人種主義・植民地主義と密接な繋がりを持ってきました。また、大阪・関西万博においては、労働問題やイスラエル参加問題、会場問題などの数多くの問題が発生しています。このような、概念的・現象的に多くの問題があるイベントは平和と民主主義の理念と相入れるものではないように思われます。

また、以上のような論点を踏まえて、立命館大学の平和と民主主義の理念を貫徹するべく、ビラ貼り・タテカン規定の見直しを働きかけたいと思います。これは、前述の理念貫徹のためには日常のかつ活発に様々な社会問題に関する議論が行われる必要があるためです。

立命館大学の平和と民主主義を掲げる学問の府としての立場は、ビラやタテカンといったメディアの活用によって、学生の意識変革がなされ現代の諸問題に対する議論が活発化することにかかっているとさえいえるでしょう。

ここまで示した論点以外にも、平和と民主主義の理念を貫徹するためには、様々な議論が必要になると思います。いずれにしても、理念貫徹のために尽力したいと考

えています。

以上の経緯・動機から、このたび中央常任委員長に立候補いたしました。

投開票日 二〇二四年一月二日

二〇二四年度立命館大学学友会中央選挙管理委員会